
桜舞う頃に

茉莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜舞う頃に

【Nコード】

N4662R

【作者名】

茉莉

【あらすじ】

共に神に愛されし姫と皇子。

出会うのは必然でした。

愛し合うのも必然でした。

でも、こんなに恋が辛いものとはしらなかった。

そして、こんなに嬉しいものとも知らなかった。

出会い（前書き）

この小説は元は私の別名名義の？ サイトにて某アニメの二次小説を書きなおしたものです。

元の小説とは違った話になると思います。

出会い

出逢ったのは桜の木の下。

必然、だった。

お互いが運命だと、そう感じた。

必ず私は彼の妻に・・・・

必ず俺は彼女を妻に・・・・

亜麻色の髪に、紫玉の瞳の姫。

神の寵愛を受け異形とも取れる容姿の姫。

あまりの美しさに、奥に秘され、噂だけがめぐりめぐる…

幼くとも一生の恋だった。

あなたと出会えたのは必然でした。

時の権力者、左大臣家の姫として、暮らしていた自分がたった、一度自由な時間を得たときに出逢った人。

神の寵愛を受けた者としてその証が瞳と髪の色に表れ、それゆえに秘されていた私。

たった一度、その時間も不憫に思った母が与えてくれたものでした。

藍色の髪の、翡翠の瞳を持つ彼。

私と同じく神の寵愛を受ける次期帝と名高い皇子様。

身分ゆえに、この生まれゆえに好きな人と将来を結べないと思った私が愛した人。

幼くとも……一生の恋で、ずっと愛し続ける人。

また、逢いたい……

「淳貴親王様、お上がお呼びです。」

清涼殿に参られよとのこと。

お願いいたします。」

そういつて内侍が呼びに来る。

またか・・・

そうため息をつく淳貴。

ソレもそのはず、2日と開けずに淳貴の父である清冷帝は呼びたてる。

それも決まって同じ事で。

「早くお前も正妻を娶れ。」

だからだ。

現帝、清冷帝には一人しか子供がない。

ソレが現東宮である淳貴親王である。

東宮には側室はおろか、正妻も決まっていない。

それは淳貴が娶る気がさらさらないからなのだが、話だけは来ているのだ。

この時代、貴族の娘が帝、東宮に入内するのは大きな意味を持つ。

それが分かっているだけに淳貴は来る話、来る話を蹴っていたのだ。

“淳貴親王”を見ずに、“淳貴親王の向こうに見える華やかな世界や権力”を見る女には。

俺は権力を得るための駒じゃない。

淳貴親王1個人として見て、愛してくれる人と・・・・・・・・

己の立場上難しいと分かっているながら、それでも諦めきれずにいたのだ。

東宮ながら既に国政に参加し、有能振りを発揮する淳貴。

誰しも東宮としての力量を認めていた。

そして、それだけに娘を嫁がせ、子を生して欲しいと願う相手。

淳貴は何も一生独身でいようなどと思っているわけではなかった。

淳貴は自分の愛する人と添い遂げたいと願っただけ。

難しいと思っただけも・・・・・・・・

だからだろう、

「お前にも選ぶ権利はある。

2週間時間をやろう。

それ以上はやれん！！

それまでに探してこい！！

ただし、お前の身分を考えた上で選べ！！

以上だ。下がれ！！」

そういわれたときに横暴な！！と思っても仕方ない。

この時代、どうやって探せというのか。

垣間見でもしろというのか！？

ふざけるな！！

そう思いながら厩舎に向い、玄武に跨ると一目散に内裏から飛び出した。

淳貴しか知らない、抜け道を通して!!

向う場所は亡き母上の愛した別邸だった。

淳貴は父と母のように自分が愛し、愛されるものと婚姻を結びたかった。

愛した人の子供でなければ、愛せるはずもないから。

なのに誰も淳貴の心のうちを気づいてくれない。

やるせない思いでたまらなかった。

出会い（後書き）

玄武Ⅱ馬です。

そして、東宮が簡単に皇居から出れるわけありませんが、突っ込みはナシでおねがいします。

独白そして・・・(前書き)

基本ようやく主人公が出てきます。
ようやくとー！

独白そして・・・

「そなたはゆくゆくは后がねとなる身。

劳られよ。

そなたを見ればさぞや東宮も心を動かされましようぞ。」

たまに会いに来る父君はそうとしかいわない。

私の身を心配などせず、その先に見える権力を得ることが出来なくなることを心配する。

私のことなんて眼中にない。

私の気持ちを無視して・・・話を進める父君。

私は、私は左大臣家の姫君であっても淑子なのに。

どうして誰も“淑子”を無視するの……？

父君が母屋に戻った後、淑子は涙を流していた。

宮中に出て、恥ずかしくないよう、他の女御、更衣に負けないよう・
・・・・

そういつて教養をつけさせてばかりで自由がない。

外に出ることも、誰かと遊ぶことすら出来ない。

異母兄の篤高は既に父君の考えに沿う妻を迎え、本邸を出て行っている。

あの2人は元々気が合うからいい。

元々幼馴染の関係だから……

篤高の妻となったのは内大臣家息女の雅子姫。

母が現帝の妹君にあたる高貴な方である。

「もう・・・やだぁ・・・」

顔をゆがめ、淑子は泣きだしていた。

この場所に閉じ込められるのが嫌でたまらなかった。

そんな淑子を見ながら心配そうにしているのが淑子付の女房である相模だった。

だからだろう、母である倫子に頼み込んでくれていた。

「姫様はこのところ塞ぎこみ、元気がございません。

静養のため、しばらく別邸に行かせて差し上げてくださいます。」

そう頼み込んでいた。

いくら相模といえど、東宮入内を失くすことは出来ない。

未だ東宮からいい返事が来ていないことが淑子にとって希望であるが、それもいつまでもつか分からない。

東宮たるもの、いづれ妻を娶らねばならない。

そして、淑子の家は左大臣家。

摂関家でもある左大臣家の申し出を断れないのだから。

「分かりました。私の方から殿には取り成しておきましょう。」

最初はいい顔をしなかった父も母のとりなしでそれを認めてくれたらしい。

母からの文では覚悟を決める時間を差し上げます

そうしたためられていたのだから。

事態が好転したわけではない。

だけど、淑子にとっては嬉しかった。

一人でいられることが……

お供を2、3人連れ、左大臣家ゆかりの別邸に向う淑子。

そこは緑豊かで、自然が多く、淑子が気に入っている場所だった。

牛車に乗って都から一両半日……

その場所に左大臣家ゆかりの別邸があった。

ほとんど父や母は訪れない場所。

淑子も幼い頃から2、3度しか来たことのない場所だった。

牛車から降り、通された部屋からは萌出ずる花々が見え、御簾ごしではあるが心地よい風が入ってくる。

御簾近くから外を覗く淑子に相模は

「姫様、そのような端近にお寄りになってははしたのうございます。下々の者にお姿を見られてしまいます。」

そう告げるが、気にしないという風に淑子は言った。

「大丈夫よ？相模。」

ココはほとんど誰も住んでいない人里はなれた別邸ですもの。

誰もこの場所に来るわけではないわ。

ねえ、御簾を上げて頂戴？

庭の花々をゆっくりと見たいの。」

久しぶりの開放感からか、淑子は相模に御簾を上げるよう言った。

心配そうではあるものの、淑子の表情が冴えないことから出来るだけ叶えてあげようと考えたのであろう。

相模は御簾を上げていく。

ほとんど来ることのない別邸とは言えど、手入れは行き届いていたらしい。

都の家とは違う庭の作りに淑子は笑顔を浮かべていた。

そんな淑子を見て安心したのであろう。

相模はするべきことがあるからとその場を辞去し、淑子を一人にしてくれた。

いつまでもボーっと見て和む淑子ではなく……

いつの間にかあの話に戻ってしまう。

考えたくはない、逃れたいと思うのに……

そんな自分が嫌で……

この場所を離れたくて……

淑子は突発的に履物を用意すると屋敷から抜け出すのだった。

まさかこの先、運命の出会いをしようとは淑子にも知りようがなかった。

独白そして・・・（後書き）

主人公の名前は淑子よしこです。平安時代に淑子って名前のお姫様いたかどうかはわかりませんが。

このお姫様、何気に行動派ですね！！屋敷抜け出したし！！

桜の下で（前書き）

ようやく出会います。

そして、どの神の祝福が淑子にあつたのか明らかに・・・
神の祝福を受ける姫や皇子、公卿は他にいたりします。

さて、誰に誰の祝福があるのでしょう？

おいおいに明かしていきます。

桜の下で

別邸から北に少し歩いたところに開けた場所があった。

木々が生い茂り、透き通った蒼の湖が広がる場所。

淑子しか知らぬ場所だった。

幼い頃、見つけた自分だけの場所。

逃げ場所だった。

そして、神の降臨があった場所。

「んゝ!!!!!!」

手を伸ばし、息を思いっきり吸う。

こんなことが出来るのもこの場所だから。

屋敷の部屋ではそんなことをすれば女房から叱られるのだから。

「次期女御となられるお方がなんととはしたないことを。」

そういわれる。

あそこでは淑子は羽も伸ばせない。

湖を見ていると水浴びをしたくなってしまう。

久しぶりに泳ぎたいと・・・・・・・・

とことん羽を伸ばしたいと思っていた。

近くにあった桜の幹に着物をかけ、淑子は小袖だけで水の中にもぐっていった。

「あっ・・・・気持ちイイ・・・・」

ひんやりした感触に、淑子は満面の笑みを浮かべていた。

春だからか、水は冷たかったがそんなことは関係ない。

モヤモヤと心に影を落とすものを水がすべて洗い流してくれるように。

スイスイと泳ぐ時間。

誰にも見咎められない時間がそこに存在したのだから……

水面から顔を出せば、水面には桜の木が映っており、ハラハラと花びらを降らせていた。

水面が揺れるそのとき、初めて淑子は気づく。

誰かそこにいたことを。

知らぬものが、自分以外のものがあるという……

そして、ソレは淑子にとって恐怖以外何者でもなかった。

盗賊？

私は殺される………？

恐怖でガタガタと震える淑子。

そんな淑子を見るに見かねてだろうか、声をかけてくる人。

「なぜにあなたみたいな人がここにおられるのです？」

見たところ鄙びてないから公達なのだろう。

着ている狩衣も立派なところからみてもそこそこ上位の公達であることは確かだった。

だからこそ、淑子は慌てる。

女性が将来添い遂げるもの以外に早々姿を見せるものではないのだから。

こんなことが都にいる父君に知られたら………

そう思い、逃げようと水面から上がり、逃げようとするものの・・・

はたと自分の姿に気づく。

自分は今、小袖だけ。

水の中にいたため、肌にぴったりとくっつき、体の線を晒していることに。

慌てて淑子は目の前の公達から体を隠すように木々の裏に回り、姿を隠す。

「どうか、どうか今見たことはお忘れくださいませ。」

震えながらもそういう女性。

チラッとしか見ることは叶わなかったが、漆黒の美しい髪に神の啓示を受けた証の紫の瞳。

美しいとしかたと言えないほどの美姫だった。

あの物腰だどこか高貴な生まれの姫君なのだろう。

印象的な紫の瞳で都で知らぬものはないうわさの美姫のことを思い出す。

『水に愛されし姫』と呼ばれる左大臣家の息女 淑子姫を。

自分を含め、神に愛されし子が生まれることがある。

そんな時、瞳にその揭示がなされるのだが、同時期に自分を含めて5人もの神に愛されし子が生まれることはまずない。

神は気ままなのだから。

奇跡としか言いようのない同じ時に生まれた神の祝福を受ける姫。

彼女が祝福を受ける神は『木花咲耶姫』

初めて降臨した神であった。

木花咲耶姫の祝福を受けたこの姫に『水』の祝福があつたのは有名である。

桜の下で（後書き）

ようやく、主人公の相手が出てきました。
もちろん、彼が祝福を受ける神はあの神ですよ。
分かりましたか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4662r/>

桜舞う頃に

2011年4月2日14時07分発行